たけしくんがラーメンをすきになったわけ！

西宮市自立支援協議会権利擁護委員会専属　差別解消法紙芝居作家　清水明彦

（ドンドンドン♪　さぁー紙芝居始まりますよーはい、見たい人集まって。見たくない人は遊んでたらいいですよーはい、最後まで見てくれたら、これ、みんなにあげるねー「差別解消法パンフレット」みんなの大好きな、みやたんがついてるよー。はいこっち見てねー）
（これ何かなー「ハンバーグ」　みんなハンバーグすき？？そうそうこれはー「ラーメン」　ラーメンすきな人！はい！今日の紙芝居は）

「たけしくんがラーメンをすきになったわけ！」（たけしって市長さんのなまえといっしょだね）
たけしくんはハンバーグがとてもすきでした！（みんなもいっしょかな）（いっしょだね）
たけしくんは10才小学校の4年生です！（みんないっしょくらいかなーいっしょやねー）
たけしくんは生まれたときから「しょうがい」があって、自分の手や足を自分の思い通りに動かすことができません。（自分の体やのにね。たいへんやね。）**歩いたりするのはもちろん、寝返りなんかも自分でできないのでおかあさんやらに手伝ってもらっています。そしていつも寝てる姿勢の車イスに乗っています。ごはんを食べたり、おトイレしたりするのも同じことです。何でも誰かに手伝ってもらわないといけません。お話するのも、言葉をはなすことはできません。アーとかウーとか声は出せますが、自分の気持ちを言葉にして言うことはできません。**（みんなとちがうねーちがうよねー）**それでも悲しかったり楽しかったり、うれしかったりする心はみんなといっしょです。**（当たり前だよねーいっしょだね）（だけどね、みんなといっしょの学校にきたりするのは、年に２～３回の運動会とかの行事のときぐらいなんだよ。たけしくんは普段は「特別支援学校」という特別の学校にバスに乗せられて行っています。もっと、みんなといっしょに遊びたいのにねー）
ぼくは（これからは、たけしくんに話してもらうね）**学校とは別に、月に２回は療育園というところへ行って、訓練とかリハビリというプログラムに参加しに行っています。体のかたちが変わってしまったり、あちこちもっと動かなくなったりしないように、お母さんと特別にそこへ通っています。**（みんなとちがうねー、でもみんなも歯痛くなったら歯医者さんに行ってるよねーいっしょやねー公文やスイミングスクールに行ってるよねーいっしょかなー）
ぼくはこの療育園に行って帰りにそのすぐ横にあるレストランで大好きなハンバーグをお昼ごはんに食べるのがとても楽しみでした。（みんなもそんなことあるよね）
ぼくは口がうまくあけることができず、食べ物をかんだりうまくできません。飲み込んだりするのも全然ヘタクソです。むせてしまってゴッホゴッホせきこんだりします。だからお肉が粉々になっていて、飲み込みやすいかたまりになっているハンバーグがとても食べやすいのです。ハンバーグのようなものしか食べれないと言ってもいいくらいです。
その療育園の横のレストランに行けるようになったのは、階段が何段もあって高くなっていたレストランの入口にスロープがついたからです。（今回できた法律「障害者差別解消法」で車イスの人もお店に入れるようにしなくてはおかしい、ということでスロープがついたのです。）**【合理的配慮】**
ぼくとお母さんはいつも療育園が終わった後そのレストランのちょっと急なスロープをかけのぼっ

て、そしてお母さんはうまく入口のガラスドア開けて入るのです。ガラスドアの向こうにレジのお姉さんがいるのですが、いつも知らん顔で見ています。そして、ぼくとお母さんは隅の方に座ってぼくはハンバーグそしてお母さんはぼくに食べさせながらつまめるようにとサンドイッチとコーヒーです。
周りのお客さんたちはみんな男の人はネクタイ、そして女の人はなんかきれいな格好です。みんなすまし顔ですが、でもなんだかしんどそうでもあります。ぼくとお母さんが入ってくるとみんなジロジロ見て何かささやいたりしています。あんまり居心地はよくありません。でもぼくはハンバーグが食べたいのでこの店に行きます。お母さんは何かに追われるようにサンドイッチを頬張って必死でぼくが食べる介助をしてくれます、そして冷めたコーヒーをすすってすぐに店を出るのです。
あるときこの店で、ぼくが風邪気味で息がしにくくなったり食べ物がつまりやすくなっていたので、吸引器（のどの奥の方につまっているものを吸い取る小さな掃除機みたいな機械）を使っていました。特別支援学校や療育園でもいつもしていることです。すると店員さんが飛んで来て「お客さま、ここでそういった医療器具を使うのはご遠慮下さい。当店では責任を負いかねます。」と言われました。（なんのせきにんやろね・・・）すると後ろに座っていたおばさんがお母さんに向かって「こんな病気の子は病院に置いとかないとダメよ。レストランなんかに連れて来たらダメ」と言いました。
すると今度はその店員さんがおばさんに言うのです。「お客さま迷惑をかけてすいませんねーただこの人たちの入店を拒否する【不当な差別的取扱】と（お店に来てはいけないと言うと）訴えられるんですよ、すいませんね～そんな法律ができてるんです」と言ったのです。
ぼくはしょうがいがありますがみんなと同じです。ぼくは小学４年生です！何でレストランに来てはいけないのですか。何で病院にいなくてはいけないのですか。ぼくはこのおばさんに言われたことにすごく悲しくなりました。そして、お母さんは、このおばさんに対してこの店員さんが言ったことにもっと悲しくなったのでした。
そんなことがあっても、ぼくはハンバーグが好きでこの店に行くのでした。
ある日、療育園のプログラムが少し長引いてしまったのですが、いつも通りにお母さんとそのレストランのスロープをのぼって行きました。するといつもと違うネクタイをしたお兄さんがレジの前にいました。お兄さんはぼくたちを見て顔をしかめました。そしてちょっと間をおいて、「あの…、すいません。今日は予約でいっぱいなんですよ」と言うのです。奥をのぞいたらいくつもの席が空いています。予約をしている様子もありません。（うそや、うそやなー、店の人うそいうてるよなー）けれどお母さんは、「あっそうですか」と言ってスロープを下りていったのです。そして、「たけし、ごめんね、ごめんね」何回もそう言ったのです。

外に出ると空がにわかにかきくもってきました。さあ大変、寝たままの姿勢の車イスに乗っているぼくの顔にぽたぽたと雨粒が落ち始めました。

何とかしなければ…とりあえず店のひさしのしたに駆け込みました。すると目の前に何かむかしのお店のようなラーメン屋があったのです。見ると「当店じまんのラーメンお昼の営業は14：00まで」の汚れた札がかかっています。閉店まであまり時間がありません。お母さんはどうしようと思いましたが雨はどんどん激しくなり、吹き込んできました。「えいっ」と思い切ってガラガラとそのラーメン屋の戸を開けました。

するとラーメン屋のおやじが「いらっしゃいませ」と大声で奥から近寄って来たのです。そしてほんの少し段差のある入口のところまで来て、ぼくの車イスの前輪を少し持ち上げてくれたのです。「すいませんなー」「くそっこの段差め！」と言って、おやじは段差のところをトントンとこずきました。お母さんとぼくはそのしぐさがおかしくてつい笑ってしまいました。
店はだいぶ混んでいましたが、おやじが大声で「どうぞどうぞ」と言うので、作業服のにいさんが真ん中の席を空けてカウンターに移ってくれました。おやじは「どうもどうも」と上機嫌です。
よくみると周りのお客さんもいろんな人がいます。席を譲ってくれた作業服の兄ちゃんは、何事もなかったようにうまそうにラーメンをすすっています。怖い刈り上げの兄ちゃんもラーメンをうまそうに食べています。その横でじいさんは昼間からビールを飲んでいます。おばあちゃんたちや中学生たちも、ラーメンを食べ終わっているのにペチャクチャと話を続けています。みんなラーメンを食べたりしゃべっています。でもみんないきいきしていて、ぼくやお母さんをじろじろ見たりしません。そしてみんなとても楽しそうです。
「当店じまんのラーメンでよろしいでしょうか」とおやじは大声で言ったので（どうもこれしかメニューはないようなんですが…）お母さんもぼくも何かわからないけど、その勢いに押されてハイハイと言ってしまいました。
１杯のラーメンがドンとぼくの前に置かれました。お母さんはさてどうしようかととりあえずラーメンの麺を取り出し、冷まして小さく切るためにフーフーとラーメンを冷まし始めました。そしてチャーシューやネギはのけてしまったのです。あわてて取り皿を持ってきたおやじは「うーん」とうなりました。そしてどうしてきざむのかとか色々聞きました。「そんなに食べるのが大変だったのか」しばらくおやじはじっと見ていました。そして「すいません。もう一回作り直させて下さい」と調理場に戻りました。
10 分くらいたったでしょうか…、おやじは「ラーメン一丁」と言ってぼくの前に新しいラーメンを置いたのです。そのラーメンはとてもとても小さくきざんであって、ハンバーグより食べやすく、そしてスープにはとろみがついているのです。チャーシューもネギももやしもメンマもとてもとてもきざまれ、同じように盛り付けられています。そして熱過ぎず冷め過ぎず。おやじはぼくの目をのぞきこんで「当店自慢中の自慢ラーメンです。召し上がって下さい」と胸を張ったのでした。
そのラーメンはどんなにおいしかったことか、ぼくが生まれて初めて食べるラーメンです。なんでこんなにあったかいんだろう。なんでこんなしあわせな気持ちになるんだろう。なぜぼくは生まれてから１０年もの間、このことを知らなかったんだろう。それは夢のようなラーメンでした。
ぼくが夢の世界に浸っていると、またおやじがやってきて、今度はお母さんに「お連れさんもラーメンでよろしいですね」と言ったのです。お母さんは「あっ、はい」と返事をしてしまいました。もう時間は閉店時間になっていましたがお母さんのラーメンはなかなか持ってきません。「閉店だからね」とお母さんは寂しそうに言いました。ぼくは夢のようなラーメンをすっかり食べ終わろうとしていました。お母さんはたべおわったぼくの口を拭くためにティッシュを出そうとしました。
その瞬間「はいお待ちどう」と湯気のたつできたてのラーメンがお母さんの前にボンっと置かれたのです。そして「時間は気にしないでゆっくり召し上がって下さいな」とおやじは言うのでした。
そしてお母さんは熱々のラーメンを食べるのです。お母さんも同じく１０年ぶりのあったかいラーメンです。 ぼくと同じようにおいしいラーメンを夢のような気持ちで食べたのです。

お母さんが食べ終わったころにはお店は誰もいなくなっていました。いそいでレジに向かうとおやじは「ありがとうございました」とニコニコしています。お母さんは「ありがとう。3人分出さないと…加工代もいるかしら。作り直してもらっているし…」と言うと、おやじは口をとんがらせて言いました。「何を言うんですか。私はラーメン屋のプロですよ。ちゃんと2名様分いただきます。」とキリっとした顔で言うのでした。おやじは2人分の代金を受け取って、深々と頭を下げ、「ありがとうございました。今度来るときはこの段差はなくなっていますよ。またお越しください。」とまじめな顔で言ったのでした。
ぼくはこのとき、何だか生きていることそのままよかったと思えて！うれしくて！本当に生きていてよかったとうれしくて！ぼくは言葉を話せないけど、それでも心のエネルギーのすべてをかけて、ビビッと「ありがとう」のでんぱを送りました。そのでんぱはすぐにおやじの心にビビッと届いたのです。
「おれはこうしてラーメン屋をやってて本当によかった！」おやじはなんだか生きていることがとってもしあわせな気持ちになって、誰もいない店で1人ガッツポーズをとっていたのでした。

外に出るともうすっかり雨が上がっておひさまが出ていました。何と空にはとてもきれいな虹がかかっているではありませんか。
そして、ぼくの顔にぽたぽた落ちてきたのはお母さんの涙でした。

おしまい！

（お母さん、なんで泣いたんかなー）（みんなラーメンすきになったかなー）

【このことがあってから、たけし君はラーメン屋のおやじみたいな人にもっともっと会いたくなっていろんなところに出かけるようになりましたよ。みんなと同じように、ラーメンを当たり前に食べれる様に…。みんなとおんなじ学校にも通いたいと思うようになりましたよ。（たけし君と学校で一緒にあそべるよ。楽しみだね…！）
お母さんも、ラーメン屋さんみたいな町にしていこうと、いろんなところに出かけて行って、しあわせであったかい町を創るために大人の人に話をしていくようになりましたよ。「当たり前でしょ！」とはつらつとしていますよ。
ほんとはね！障害者差別解消法は、だれもが一人ひとり自分らしくいきいきと、しあわせな気持ちであったかい、そんな世の中をみんなで本気になってつくっていくためにできたんだよ！それだけはぜったいわすれないでね…！
今はね、たけし君はお母さんとだけでなく、ガイドヘルパーのおにいさんやおねえさんと一緒にあちこちいっぱいいってるんだよ。たけし君の、しあわせであったかいまちをつくっていく大冒険！もっともっとおもしろいことはじまるよ…！たけし君カッコイイね！】

（この紙芝居の続きはまた今度。おたのしみに･･･。）

（はい、みやたんのパンフレット持って帰ってねー。おうちの人にもお話してねーまた遊ぼうねー）

バイバイ　マタネ！！！